

敦煌本郭象注莊子殘卷十二種に就いて

寺岡龍含

敦煌石室から發見された舊鈔卷子本郭象注莊子殘卷は、現在、次の十二種を擧げることが出来る。即ち

逍遙遊	(P 三二〇四號)	巴里國立圖書館藏	內藤氏所藏寫眞
大宗師	(P 二五六三號)	〃	〃
田子方後部	(P 三七八九號)	〃	〃
外物後部	(P 二六八八號)	〃	〃
刻意	(P 二五〇八號B)	〃	羅氏影印鳴沙石室古籍叢殘
山木	(P 二五三一號)	〃	〃
徐無鬼	(P 二五〇八號A)	〃	〃
天道	(S 一六〇三號)	倫敦大英博物館藏	內藤氏所藏寫眞
外物前部	(S 七七號)	〃	〃
天連		中村不折氏藏	東方文化叢書第五覆製本
知北遊		〃	〃
田子方前半		羅振玉氏藏	羅氏影印敦煌石室遺書三種

(Pはペリオド目録)
(Sはスライズ目録)

以上掲げた殘卷十二種の中、巴里國立圖書館所藏の七種は、ポール・ペリオ氏探検隊が佛國へ持歸つたものであり、又、倫敦大英博物館所藏の二種は、オーレル・スタイン卿探検隊が英國へ持歸つたものである。逍遙遊・大宗師・田子方後部・外物後部・天道・外物前部の六種は、未だ影印されたものも鉛印されたものもない、けれども故内藤湖南博士がその寫眞を將來せられ、現在、令息内藤乾吉學士が珍藏して居られる。その前四種に就いては、既に小島祐馬博士が「巴黎國立圖書館藏敦煌遺書所見錄（九）」支那學第八卷第一節に紹介され、簡單な校字記を書いて居られる。田子方前半は、羅振玉氏が更に敦煌石室碎金の中に「南華真經殘卷 存田子方品」として校録され、又、刻意・山木・徐無鬼の三種は鳴沙石室古籍叢殘の三殘卷の跋「此の跋は永豐鄉人乙稿の雪堂校刊羣書校録卷下にも 載せられてゐるやうである。尙、敦煌本郭象注莊子殘卷の大部分は、小島博士に依つて沙州石室諸子二十六種の中に輯録鉛印される筈であるが、未だに出版されない。

偕、敦煌本郭象注莊子殘卷の殘存範圍に就いて夫々項を分ち述べて見よう。

一、逍遙遊（短斷簡）

逍遙遊篇の中再出故夫智効一官行比一鄉德合一君而徵一國者其自視也亦若此矣」より、「若夫乘天地之正御六氣之辯」窮者彼且惡乎待哉」の郭注の終に近い「故有待吾所不能齊也至於各安其性天」に至る二十二行を殆んど存してゐる。

二、大宗師（斷簡）

大宗師篇の終の方「我乘成以隨先」より、「得也然」に至る三十二行を殆んど存してゐるが、末の三行は上半部を、篇末の約一行と共に闕いてゐる。その背面に別人が佛教經文を書寫してゐる。

三、天道（斷簡）

天道篇の終の方「心再」也「吾服也恒服也」より、篇末「然則君之所讀者古人之糟魄也已夫」の郭注

「(前略)與時變化而後至焉」に至る四十行を殆んど存してゐる。卷末に異筆で「辯經各品論玄奘譯」とあり、紙背にそれのあることを標示してゐるやうである。事實、辯中邊論卷二の文が書寫してある。

四、天運(全篇)

天運篇では、卷頭書名「南華真經天運品第十四」を存し、「天其運乎」より、篇末「老子曰可丘得之矣」に至る全篇二百三十二行を完全に存してゐる。その背面に別人が佛教經文を書寫してゐる。

五、刻意(全篇)

刻意篇では、卷頭書名「南華真經刻意品第十五」を存し、「刻意尚行」より、篇末「能體純素謂之真人」に至る全篇六十行を完全に存してゐる。

六、山木(首闕)

山木篇の首を少し闕き、「也」夜行晝居戒也」より、篇末「陽子曰弟子記之行賢而去自賢之行安往而不愛哉」の郭注「言自賢之道無時而可也」に至る一百五十六行を殆んど存してゐる。

七、田子方(前半斷簡)

田子方篇の前半斷簡では、卷頭書名「南華真經田子方品第廿一」を存し、「田子方侍坐於魏文侯數稱谿工」より、「貴在於我而不失於變」の郭注「所貴者我也而我與變俱」に至る前半八十二行を殆んど存してゐる。

八、田子方(後部斷簡)

田子方篇の後部「史後至者儻然不趨受揖不立因之舍」より、篇末「由是觀之則凡未始亡而楚未始存也」の郭注「存亡更在於心之所惜耳天下竟无存亡也」に至る六十二行を殆んど完全に存してゐるが、首行の上半部を全く闕いてゐる。従つて、田子方篇全體としては、前半・後部の兩斷簡の中間約二十四行程を闕いてゐることになる。

九、知 北 遊（全篇）

知北遊篇では、卷頭書名「南華真經知北遊品第廿二」を存し、「知北遊於玄水之上」より、篇末「齊知之所知則淺矣」の郭注「夫由知而後得者假學者耳故淺矣」に至る全篇二百十五行を存してゐる。卷末に「淨土寺藏經」の黒印記があり、その左に敦煌發見後に捺した「井研龔氏古美堂珍藏」の朱印記がある。

一〇、徐 無 鬼（斷簡）

徐無鬼篇の終の方「行殆乎非我與吾子之罪幾天」より、篇末「以不惑解惑復於不惑是尙大不惑也」の郭注「夫或不可解故尙大不惑之至也以聖人從而任之所以皇王殊迹隨世爲名耳」に至る八十一行を殆んど完全に存してゐる。尙、此の殘卷の首に於て、更に一行の上部二三字を存するやうであるが、古籍叢殘では、不鮮明なる爲に、已むなく斯く爲した。ペリオ目錄に據ると、刻意・徐無鬼の兩殘卷を併舉して、背面に佛教經文の書寫されてゐることを述べてゐるが、兩卷にあるか孰れか一方にのみあるかに就いては未詳である。

一一、外 物（前部斷簡）

此の前部斷簡では、外物篇の首を僅かと後半とを闕いてゐる。併し、後半の大部分は次項に述べる後部斷簡がそれに當り、外物篇全體としては篇首と篇末とを僅かに闕いてゐるに過ぎない。此の前部斷簡は「陷」无所逃」より、與其譽堯而非桀不如」に至る四十六行を殆んど存してゐる。

一二、外 物（後部斷簡）

外物篇の中部「爾忘而閉其所譽」より、「寧可以已遽非不遽也雖然若是者」に至る五十六行を完全に存してゐる。以上舉げた十二種の中、田子方篇の前半・後部の兩斷簡及び外物篇の前後部兩斷簡は一見して同一人の手に成つた一寫本の各殘簡なることが明瞭である。そこで考へねばならないことは、殘卷十二種が一人の手に成つた一寫本の殘卷か、或は數人の手に成つた一寫本の殘卷か、或は數人の手に成つた夫々數種の寫本の殘卷か、といふことである。先づ筆跡

を見るに、大體、甲乙丙の三異筆があり、就中、甲筆が大多數を占めてゐる。次に鈔本の體裁及び縦の長さ、界線の幅、紙質、縫合の弼等に就いて調べて見るに、皆同一であるやうに考へられる。勿論、十二種全部、原物に當つて一々調べることは、今出来ないが、大體此の如く推考して論を進めても大過はなからう。従つて、これら十二種は、恐らく三四人位で協力し、餘り多くの歳月を費さず書寫した一寫本の殘卷であらうと思はれる。

然らば、此の敦煌本郭象注莊子の書寫年代は何時であらうか。今までに判明して居るところの殘卷十二種のみでは、その書寫年月を確知することは出来ない。併し、今後更に、その殘卷の出て来る可能性はあるから、後になれば或は書寫年月を確知し得るやうになるかも知れぬ。兎に角、今のところではその大略の時代を推考するより外に仕方がない。その唐時代のものなることは誰も疑はないが、羅振玉氏は帝諱缺筆に據り、刻意・山木・徐無鬼・田子方前半の四種を初唐時代の寫本であると誤考してゐる。即ち

鳴沙石室古籍叢殘 莊子郭象注
三殘卷の跋に

敦煌本莊子郭象注殘卷三、曰刻意篇、首尾完具、曰山木篇、曰徐無鬼篇、皆佚其前、諸卷中世民字均缺末筆、治字則否、太宗朝寫本也、

敦煌石室遺書三種 南華真經殘卷に
(存田子方品)の跋

南華真經殘卷存田子方品之前半、凡八十四行、虎淵民三字皆缺筆、書法精善、出初唐人手、とある。

敦煌本郭象注莊子では南華真經といふ書名を用ひ、天運篇に於ては隆の字を缺筆してゐるから、玄宗の時代より更に以前の寫本と爲すことは斷じて不可である。

唐會要卷五十雜記に

天寶元年二月二十二日勅文、追贈莊子南華真人、所著書爲南華真經、文子・列子・庚桑子、宜令中書門下更討論奏

聞、至其年三月十九日、宰臣李林甫等奏曰、莊子既號南華真人、文子請號通元真人、列子號沖虛真人、庚桑子號洞

靈真人、其莊子・文子・列子・庚桑子、並望隨號稱、從之、
とあるのに依れば、莊子追號のことは舊唐書・新唐書等にもある 莊子を南華真經と稱するやうになつたのは玄宗の時からであることが判り、從

つて、天寶元年二月二十二日以後の寫本であることが斷定される。
たゞ南華と云ふ號は何時から始つてあるか判然しないが、南華真經と稱するに至つたのは玄宗の時からである。

又、逍遙遊・大宗師以外の殘卷では、唐諱に當る文字の中、虎・虓・柄・淵・世・民・隆の七字に互り全部ではないが、缺筆してゐる所が多い。太祖の名が虎、世宗が曷、高祖が淵、太宗が世民、玄宗が隆基である爲に避諱缺筆して居るのである。尙、殘卷には此の七字以外、唐諱に當る文字を含んでゐるが、皆缺筆してゐない。そこで各殘卷の缺筆狀態を次に圖示しよう。

殘卷の篇名		缺筆の文字					
逍遙遊	虎	虓	柄	淵	世	民	隆
大宗師					不	不	
天 道		缺、 虓不		不	不		
天 運	缺		缺	缺、不	不	缺、不	缺
刻 意				不	不		
山 木				不	不		
田子方 前半	缺			不		不	
田子方 後部				不		不	

てゐるもので、この點、現行本敦象注莊子と同じである、が一篇一章のものは別とし分章提行し、毎篇を一巻とした十三卷の卷子本であることに至つては、現行本と異なる所である。現行本郭象注莊子は皆、分章提行せず十卷三十三篇と成つてゐるけれども、郭象の成した原形は三十三卷三十三篇であつたやうであるから、此の寫本はその舊裁を傳へてゐることが判る。内容に就いては、宋本以下の諸本と對比するに、寫本の常として誤傳誤寫もあるが、文字の異同が多く、宋本以下を訂正することが出来る。宋本以下では、殊に者矣也耳などの助辭を脱落してゐるものが多い。要するに郭煌出土中唐寫卷子本郭象注莊子は殘十卷十二種に過ぎないが、本文攷證、分章論定、書史攷究、郭象注論究など孰れの場合にも重要な材料となり、莊子研究上、缺く可からざる位置を占めてゐるものである。

此の小論文は昨年十月東京文理科大學卒業論文の一部として執筆したもので、今その舊稿の儘を本誌に載せることにしたのである。(昭和十二年十月十日記)